

・ 合宿の1日目夜のパートは毎回、公開個別フォローで企画されています。

回を重ねるうちに、陽子さんの毎回の個別フォローで頂く言葉に少しでも近づける何かを言えないかと頭を絞るようになりました。

今回も、これまで1年ミーティングを重ねて、メンバーの情報量は増えているはずなのに、端的に刺さる言葉を選べず、膠着状態を続けてしまったと思います。

対比として、傾聴ワークショップでは、そういった作りになっていることは理解しているのですが、リアクションを抑えた方が本音を話しやすいという状況で、いかに言葉を上手に使えていないかということも実感しました。

一人のメンバーのセッションでは子供の頃の「分かってほしい」「分かってほしかった」というキーワードがありました。その部分に対する有効的な声掛けが浮かびませんでした。その相手は亡くなっているからです。

一方で、陽子さんが途中話していたように、生きていたとしても話が通じない部分を持つ親(私の父親にも通じる部分があります)という存在を考えると、生死の事実は相手を乗り越える時には私が決定的違いと思い込んでいるほどの重みはないのかもしれないと思いました。

二人目のセッションではお父さんからの最後の言葉について深掘りがありました。

お父さんが本当の所、何を思って頑張れと伝えたのか、分かり切らないところもあるのだけれど、頑張らなければいけないと捉えてしまったそこまでのお父さんとの関係性の実績は大きいと思った。

私のセッションでは題材は"子供"を選んでいましたが、本当に私が向き合って乗り越えなければいけないのは(陽子さんがコメントした通り)"元夫"だったということに気付きました。

いくつかの疑問を無視しての結婚、出産。

自分の直感がそれなりに正しいことを知っていながら見て見ぬふりをした結果が、子供をひとりで育てることだったとしたら、やっぱり子供に申し訳ない気持ちがあります。(それは、私が感じ続けなければいけないことだとも思います)

一方で、もし私が正常な頭で思考して、元夫と結婚しなかったとしたら、当然目の前の子供は存在しない訳です。つまり子供の存在を否定することになる。

もちろん生活に必死だったこともあります、この心のループが厳しくて、向き合うことを避けていたとも思いました。

死んではいけないけれど感情のやり取りはないという意味で、もうなくなった関係性に対してきっちりと吊うことで次に進めるというのは、他のメンバーの話に通じる部分があると思いました。

最後のメンバーの時は、この取り組みの中で、何を拾い出せばよいか悩んでいるような言葉の使い方を感じました。

ぽつりぽつりと話している中で、人との距離を最も縮める可能性があり、感情がとんでもなく揺らされる可能性のある「恋愛」が抜け落ちている(避けている?)ことに薄い違和感を感じました。

まだ確証が得られなかったのですが、もし意図的に遠ざけるようにしたとしたならば罪深いとも感じました。

でもそれが上手く伝わる言葉には出来なかった気がします。

いずれのセッションでも制限時間を押してしまい、メンバー4人だけであれば収束しませんでした。これをどこかの着地点に持って行けるようにしたいと課題感の残った時間でした。

(A.S 40代女性 大阪府)